コラム 派遣レポート

名前	派遣先	派遣期間
田　遠	北京師範大学文学院　民俗学与文化人類学研究所	2012 年 3 月 1 日～3 月 21 日
李　徳雨	浙江工商大学　日本文化研究所	2012 年 3 月 5 日～3 月 25 日
于　洋	ブリティッシュコロンビア大学　アジア学科	2012 年 3 月 8 日～3 月 23 日
白 莉 莉	ハイデルベルク大学　クラスター	2012 年 5 月 2 日～5 月 22 日

帰国した華僑・留日学生が語った戦後初期における在日中国人留学生組織の結成―東京を中心に―

田　遠
（外国語学研究科中国言語文化専攻　博士後期課程）

1. 中国人留日学生組織の結成

対面した 78 歳の郭氏は、かなり活発な性格と温厚な人柄が印象的であった。彼は「戦争終結直後は、日本各地にいる中国人華僑・留学生たちにとって組織を結成することがなによりの急務だったが、東京でも神戸でも組織化に最初に動いたのは台湾人のグループだった[1]」と語り始めた。これは「結成」というよりも、日本に対する愛国心や忠誠心に反発したことで、日本政府から弾圧された台湾同郷会の再結成に近いものであった。最初に台湾人留学生組織は、台湾同郷会の学生部としての形をある程度揃えた。しかし、1945 年 9 月、日本在住の台湾人たちが、明治学院大学で台湾同郷会の成立大会を開催したものの、まもなく内部分裂があり、統一性のある同学会はできなかった[2]。しかし、中心となるメンバーは基本的に揃った。このような背景があり、一ヶ月あまりの準備期間を経て「台湾学生連盟」が結成され、機関紙「龍舌蘭」の発行や各部門の具体化、名簿の作成などの活動を始めた[3]。

その一方、大陸出身者たちはそれぞれの政権の崩壊や他の原因により、戦争中には帰国せず、戦争終結直後に改めて相互の連絡を取ったが、組織化を進めることは容易なことではなかった。まず政府当局に戦時中の生活の経緯を説明し、配給と救済金受給のために、合法的な身分を取得しなければならなかったことを考えると、老人は「ある意味、大陸出身留学生の生活は、台湾人留学生より優遇されていたとは言い難い」と話した。組織をまとめるにあたり、貧しい生活のせいもあるが、過労で亡くなった大陸留学生幹事も数人いた[4]。1945 年 12 月中旬、大陸出身留学生組織である「中華民国留日学生東京同学会」がようやく発足した。

2. 二つの留学生組織の合併

1946 年に入ると、二つの留学生組織を合併する問題が浮上した。台湾人留学生であれ大陸出身留学生であれ、「留学生」である。曾ての敵国で何を習ったか、そして祖国・中華民国に対しての「忠誠心」はどうなっているのか、これらの疑問を持つのは、戦争に惨勝した中華民国政府にとっては、当然のことであろう。老人もこれについては「留日生活経緯の説明と忠誠を誓わせることは必要なことだった」と説明した。1946 年 2 月、合併に原則的に合意したところで、大陸出身の留学生たちは国民政府教育部宛に「中華民国留日同学総会」の名義で手紙を送った[5]。これはおそらく、個人で説明するより、組織団体だと対話が進みやすいと考えたのであろう。

ここで提起したいのは、二つの留学生組織が合併する際、大陸出身の留学生と違い、台湾人留学生たちの身分は曾ての「日本帝国臣民」から「中華民国国民」へ転換することになったが、それは決して容易なことではなかったという点である。歴史的な経緯もあるため、政府と、抗日戦により日本軍を「追い出した」当時の政府を敬っている大陸出身の学生は、台湾人留学生を簡単に受け入れようとはしなかった。さらに言語の壁もあった。郭氏の記憶によると、当時は、台湾人たちが学生寮内で話す言葉はだいだい日本語か台湾語だったらしく、帰国

1　2012 年 3 月　郭氏のインタビューより
2　2012 年 3 月　廖氏のインタビューより
3　林連徳　「中国留日学生総会側記」―『建国初期留学生帰国記事』 P400-401 中国文史出版社　1999 年
4　『中国留日学生報』1952 年 3 月号
5　2012 年 3 月　郭氏のインタビューより

後、仕事の際もお互いに日本語で話したということである。また、台湾出身者は連合国人として取り扱われてないため、戦後出された「連合国人及び中立国人、無国籍人に対して食糧の特別配給制度」の対象外になり、「中華民国国民」という身分を入手しないと配給がもらえないという問題も抱えていた。そのため、当時、東京同学会と合併することについては、台湾留学生連盟のほうが急いでいた。これらの問題は両組織合併後にもずっと絡まっていたようだ。「一言で言うとね、私は『戦後初期には、大陸出身の方でも、台湾留学生でも、迷迷糊糊（ミーミーフーフー　混沌）』としか言えない状態だった」というのが郭氏の感慨であった。日本の敗戦当時、中国自体が従来の「政権」（日本統治下の台湾復帰、満州国、汪精衛政権などの傀儡政権の崩壊など）を大きく変動させることになり、それは日本にいた中国人華僑・留学生にとって大きな試練となって降りかかってきた。在日中国人社会の変貌も戦後の外国人登録や戦勝国民特配などにより加速し始めた。その中で、知識人としての中国人留日学生の動態は、今日に至る日本と中国（中華人民共和国、中華民国）との関係の一つの原点として注目されるべきだと思う。

近・現代化に伴う中国杭州の食生活変化の断面

李　徳雨
（歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

2011年、非文字資料研究センターから嬉しいニュースが届いた。それは、私が派遣若手研究支援の一環として、派遣研究員となることを許可された通知書であった。韓国から日本に留学をしている私が、中国で3週間の派遣研究を行える事になったのである。2012年3月5日（月）から3月25日（日）まで、中国浙江省にある浙江工商大学の日本文化研究所に「近・現代化に伴う食生活変化の研究」というテーマで訪問することになり、王勇教授、陳先生など、現地の先生とチューターさんのお陰で、中国の食生活を体験し、調査することができた。

筆者は韓国・日本の食生活に関心を持っており、特に近代化以降、変化した食生活にフォーカスして研究している。今回、中国の事例は日韓の事例とは別の研究テーマとして、また東北アジアの一つの国として、日韓中の相互理解をするために、距離的には近いが異なる食文化であること、またその変化の研究を比較するために中国という国を選択した。

浙江工商大学は上海から車で2時間ぐらい離れた杭州という所にあるが、筆者が訪問した日本文化研究所は、さらに杭州市内から1時間ぐらい離れているところの下沙（シャーシャ）キャンパスにあった。杭州は南宋時代の首都で「西湖」と呼ばれる自然遺産があり、中国人が人生の最後に住んでみたいというような観光地でもあり、環境的に安定している場所である。また龍井村という中国最大の茶葉生産村があり、中国で唯一のお茶博物館がある。お茶というのは単に食事の後の飲み物としてのものだけではなく、食生活の余裕を楽しめる嗜好飲食として、中国食文化の代表的な特徴であるといえる。また地域別に、味、栄養、香辛料などに差がある中国で、南に位置している杭州は、王様、貴族の料理から一般の庶民料理まで多彩な種類の料理があり、杭州の食文化の特徴であるといえる。特に杭州の名物として乞食鶏（Beggar's Chicken、叫化鸡）、東坡肉（东坡肉）、西湖の淡水魚料理などは、杭州食生活の特徴がよくみられる食べ物である。

今回の派遣研究を通じて得られた大きな収穫は、実際の中国人の家庭を訪問し、彼らの食生活を体験してみたことである。3月のある日、Aさんの家の夕食会に招待された。 Aさんの家では、主に夫が料理を担当し、招待された8人くらいの友人たちと一緒に夕食を食べさせて貰った。中国の多くの食べ物を食べてみることができる機会でもあったが、それよりも彼らがどのように料理を準備し、どのような話をしながら食事をしているのかに非常に興味があったが、食卓では彼らの考えなども感じることができ、非常に意味がある席となった。

また 吳山広場（吳山广场）という所の小吃（シャオチー）文化（屋台料理）は、日本、韓国とは違う庶民の食生活をのぞくことができた機会であった。びっしりと並んでいる屋台のような店で様々な食べ物を選んで真ん中のテーブルで食べている人々、また日本や韓国では簡単には食べることができない様々な食材で調理された料理を観察した。